

人間存在の階層構造

下程 勇吉

目次

- 一、人間存在の階層構造論の歴史的背景
 - (1) 西洋精神史における人間存在の階層説
 - (2) 仏教における人間学的階層説
 - (3) 儒教における人間学的階層説
- 二、教育人間学的立場の階層構造

一、人間存在の階層構造論の歴史的背景

古来、東西両洋の哲学史・思想史において、多種多様な人間存在階層論が唱えられている。以下、その若干を取り上げて、教育人間学における人間階層構造論に対する予備論的考察とするであろう。

(1) 西洋精神史における人間存在の階層説

(1) プラトン（紀元前四二七―三四七）

最も低次の基本的段階に属する人間学的規定は、「節制」の徳を奉じて勤労に励む生産者の「身体」であり、そ

の次の段階は、「勇氣」の徳を体して国防に努める軍人の氣概の座としての「魂」であり、最高の段階は、知恵の徳を体して理法によりて國家を治める支配者即哲學者として、純粹の形相を觀る「精神」である。すなわち略言すれば、身体・魂・精神の三段階説である。

(2) アリストテレス(紀元前三八四—三二二)

アリストテレスの立場も、その師プラトンの身体・魂・精神の三段階説の立場に近いと要約せられる。

(3) プロチノス(二〇五—二六九)

いわゆる第一實在たる一者からの万有發出論を説く、新プラトン派の首唱者プロチノスは、最高善の超越的實在としての一者から、理性・心・資料(非有)と段階的に流れ出ると説いているところから、その立場は物質・心・精神・超越の階層的存在論の立場と云われる。

(4) グノーシス派

神性の火花と反神性の物質との力動的混交の場としての人間は、「靈」(pneuma)「魂」(psyche)「肉」(sachs)「物質」(soma)の四段階的存在である。かかる人間生成論をうけて、エラスムス(一四六六—一五二六)は、「靈は我々を神とし、肉は我々を動物とし、魂は我々を人間にする」と説いたのであった。

(5) アウグスチヌス(三五四—四三〇)

古代キリスト教の代表的教父アウグスチヌスにおいては、「身体における存在」と「自己における存在」と「神における存在」との三段階によって、人間存在がとらえられているが、また他面、「存在する(esse)物」と「生きる(vivere)動物」と「知る(scire)人間」という存在の三段階説も説かれている。

(6) ダンテ(一二六五—一三二一)

ダンテは「地獄」(Inferno)「煉獄」(Purgatorio)「天国」(Paradiso)の三段階を説いている。

(7) ニコラウス・クザヌス(一四〇一—一六四)

認識面において、感覚・想像・悟性・理性の四段階説を採っている。

(8) パスカル(一六二三—一六六二)

パスカルは①肉欲の宿る「身体」、②学問等に打ちこむ「精神」、③神から来る知恵を宿すものとしての「愛」の三者をあげている。すなわち「身体の秩序」(l'ordre des corps)「精神の秩序」(l'ordre des esprits)「愛の秩序」(l'ordre de la charité)の三段階説がある(Pensés, 793)。さらにパスカルは「身体」「精神」「意識」(volonte)の三段階をも説き及ぶる(Pensés, 460)。

(9) ライプニッツ(一六四六—一七一六)

哲學者ライプニッツは、認識論的に、「極微知覚」「知覚」「統覚」の三段階説を採っているが、これは人間学的には「生命」「意識」「精神」の三段階説と呼応すると云われよう。

(10) スピノザ(一六三二—一七〇四)

スピノザは①感覺的意見(opinio)または、想像(imaginatio)、②共通觀念(notiones communes)をよぶる悟性(ratio)、③永遠の相のもとに究極真理を觀照する直観知(scientia intuitiva)の三段階を説き及ぶる。

(11) ルソー(一七一二—一七八)

ルソーは、人間関係の三段階として、「肉体的(自然的)関係」「道德的關係」「市民的關係」を「エミール」で説いている。

(12) カント(一七二四—一八〇四)

カントは、認識能力に関して、「感性」「悟性」「理性」の三段階をあげ、人間性については、動物性・人間性・人格性の三段階説を採っている。

(13) ペスタロッチー（一七四六—一八二七）

ペスタロッチーは、植物の蕾・花・実になぞらえて、「動物的本性（状態）」、「社会的本性（状態）」、「倫理的本性（道徳的状态）」の三段階をあげ、この三段階との対応において、「動物的本能」「市民的法則（契約）」、「人格的良好」の三者を位置付けている。

(14) キェルケゴール（一八二一—一八五五）

キェルケゴールは、人生行路の三段階として、「審美的実存」「倫理実存」「宗教実存」をあげている。

(15) ロッツェ（一八一七—一八一八）

哲学者ヘルマン・ロッツェは、人間学的階層として、「身体」(Leib)「心」(Seele)「精神」(Geist)の三段階をあげている。

(16) シューラー（一八七四—一九二八）

哲学的人間学という新分野の開拓者マックス・シューラーは、全体としては、「身体」「心」「精神」の三段階説を踏まえ、「身体的意識」「生命的意識」「精神的人格」の三階層に対応して、「自然科学的人間学」「哲学的人間学」「神学的人間学」を位置付けている。またそれに呼応して、快樂主義的価値・健康・強壮等の「生命的価値」、真善美の「精神的価値」、聖の「宗教的価値」をあげて、それと相即的に、「自然科学的人間学」「哲学的人間学」「神学的人間学」を位置付けている。死去の年に成立した「宇宙における人間の地位」においては、①植物にも認められる「感知動向」(Gefühlsdrang)、②動物にも認められる「本能」、③高等動物にも認められる「連想的記

憶」、④「実用的知性」⑤「精神」または「人格」の五段階説も提唱している。

(17) ヘルグソン（一八五九—一九四二）

独自の立場で生命の「創造的進化」を説くアンリイ・ヘルグソンは、「植物的生命」・「本能的生命」(本能)・「理性的生命」(知性)・「直観的生命」(直観)の四段階説を説いている。

(18) ニコライ・ハルトマン（一八八二—一九五〇）

宏大な存在論を展開したハルトマンは、①物理的物質的存在 (physisch-materielles Sein) ②有機的生命 (organisches Leben) ③心靈的存在 (seelisches Sein) ④精神的存在 (geistiges Sein) の四段階説を説いている (Hartmann, N., Das Problem des geistigen Seins 2 Aufl. 1909, S. 6)。

(19) シュプランガー（一八八二—一九六二）

エドワード・シュプランガーは、①物理的なるもの (das Physische) ②心理的なるもの (das Psychische) ③精神的なるもの (das Geistige) の三段階説を説いている。

(20) リドレイ

G・N・リドレイは「有機的人間」「知性的人間」「社会的人間」「宗教的人間」の四段階説を説いている。

(21) カイスト

K・カイストは衝動自我・知覚自我・自己自我 (Selbst-ich)・社会自我・世界自我 (宗教的自我) の自我六段階説を説いている。

(22) ヤスパース（一八八三—一九六九）

実存哲学者カール・ヤスパースは「物質」「生命」「心」「精神」の四段階説を説き、時には、「現存在」(生命)・

「意識一般」(心)・「精神」・「実存」の四段階説から、その哲学を説いている。

(23) オパーリン(一八九四—一九八〇)

A・I・オパーリンは「物質↓生命↓理性」という生成論的三段階説を説いている(一九七七年)。

(24) マンフォード(一八九五—一九九〇)

ルイス・マンフォードは人間の要求から人間をとらえ、飲食、呼吸、住家等に対する下部構造的生理学的要求としての「生存の要求」と、文化的宗教的価値や愛等に対する上部構造的精神的要求としての「実現の要求」とをあげている。すなわち天と地との間に直立歩行するところに、人間固有の本質的独自の特性があるという人間の構造の故に、地に着く身体的現実的条件からは、「生存の要求」が生まれるとともに、また同時に、天に向う精神的超越的条件からは、「実現の要求」が生まれるという、「人間の要求」の階層性が成立すると、説かれるのである。

(25) マスロー(一九〇八—七〇)

ヒューマンステイク・サイコロジの創始者アブラハム・マスローもまたマンフォードに呼応することなく、人間の身体的下部構造の要求に発する「欠乏動機」と精神的上部構造の要求に基づく「成長動機」とを彼此対照的に取り上げ、価値的に最低な「地獄経験」(nadir experience)と対照的に、時間空間を超越する「絶頂経験」(peak experience)を究明し、全人教育を志向する教育人間学に対し、幾多の貴重な洞察を興えている。

(26) 西田幾多郎(一八七〇—一九四五)

西田哲学の場合は、「物質的世界」「生命的世界」「歴史的世界」の三階層が説かれている。

(2) 仏教における人間学的階層説

仏教では、「欲界」(食欲・性欲をもつ有情の場所)、「色界」(食欲・性欲を離れた有情の場所)、「無色界」(無所住・無所有の超越界)の三階層説が説かれ、さらに「五識」(色・声・香・味・触)「意識」「未那識」^{マナス}「阿頼耶識」の四階層説が説かれ、「畜生道」「餓鬼道」「地獄道」「人道」「天道」の五道(五趣)が説かれ、また「畜生道」「餓鬼道」「地獄道」の三悪道の上に位する「阿修羅道」「人道」「天道」の三善道が説かれている。

(3) 儒教における人間学的階層説

儒教の人間学的階層説の代表的なものとして、「郷原」「狷者」「狂者」「聖賢」「天」という五段階を説く孟子の立場があげられるであろう(拙著「吉田松陰の人間学的研究」六八〇頁参照)。

二、教育人間学的立場

以上のごとく、西洋精神史・仏教・儒教の歴史的伝統における人間学的階層の流れを概観して来たわれわれは、その諸説の公約的立場を踏まえて、人間の全体構造を究明し、人間の全人的形成をめざす教育人間学的立場に立つものである。

その際、とくに注意すべきことは、以上述べたように、人間存在が本質構造的に階層性をもつことは、もともとその生成論的背景にもとづくのである。人間の生成という機能的な作用が先ず発動して、その軌跡として、人間の形態が現れるのである。ここで、機能(Funktion)が先で、実体(Substanz)は機能の後に現成するといわれるのである。「最初に行ありき」と云われる所以であり、人間の本質構造論が、まさに人間生成論からはじめられる所以である。実に人間の生成進化の年輪をまざまざと刻みこんだものが、人間の階層的構造そのものなのである。

以上よりして、「自然・物質」、「身体・生命」、「心・意識」、「精神・自覚」、「超越・本覚」の階層的構造において、天と地との間に立つ人間の生成論を展開して来たわれわれは、人間の全人的成長が自然的生成過程として、それこそ一路坦々行われるものでは、断じてないことを明確に洞察すべきである。実に人間存在は、母胎内の胎児への配慮からはじめて、出生後の養護・教導訓育・本人自身の自発的努力などと、自他百般の教育的操作によりて、自主協同の独立人格と成り得るのである。

すなわち「無律」「他律」「自律」の三段階説(ナトルプ)、「発達の援助」「文化財の伝達」「内面的覚醒」の三段階説(シュプランガー)などと、具体的に全人成長主義が説かれる所以である。

一方では、人格的社会的に未成熟の児童・生徒に対する、百般の教育的配慮が「必要な条件」であるとともに、児童・生徒自身の「自主性」、さらに学生・成人となれば、「自己自身に対する厳しさ」(die strenge gegen sich selbst) (シェリング)を核心とする自己教育が「十分の条件」として実現されるところにのみ、本来の全人教育はその有終の美をおさめるのである。まさに本来の教育は、かかる全人教育以外にはあり得ぬのである。

かかる全人教育が人間の本質的全体性の実現をめざす以上は、本来の教育学は人間の全体的本質を実現する方途を究明する、人間の全体的本質構造学としての教育人間学そのものであると云われるのである。

次にかかる人間学が究明する人間の本質的全体構造の見取図または、概略を一応明らかにしておくであろう。人間はその最下層において深く自然・物質に根をおろしている。人間のいわゆる内部環境は、外部環境とともに、自然・物質という基底をふまえている。クロード・ベルナルがはつきりさせたように、われわれの体内にある水も、自然の川にある水も、物理的・化学的性質は全く同様なのである。そういう意味で、人間の基底は、まず、唯物論者のいうように、自然ないし物質そのものである。そういう自然・物質の一角に、内部環境が構成される

とき、いわゆる神経系統を中心にして、そこに「生命」の層が現われてくる。生命はつねにはつきりしたがたとして、「身体」をもっている。

その身体の、特に神経系を中心にして、いわゆるマインド(mind)または「魂」(soul)の層が成立し、そこに「意識」があらわれる。その「魂」が社会的歴史的地平において、自分自身を意識し、いわゆる自覚(self-consciousness)に達するのが、「魂」と区別された「精神」(spirit)の段階である。

このようにして、次第に地(自然・物質)の方から天の方に高まっていくとき、あらゆる形をこえて、しかも一切を包む無の地平として「超越」の場が仰がれる。こうした最後のところは、カント的立場でいえば、悟性(Verstand)とか知性で証明することはできない、スピノザ流にいえば、「第三種の認識」、「直観知」であり、仏教的にいえば、「本覚」の次元であって、素朴な言葉でいえば、信仰の対象の世界である。

このような、階層的構造において、人間は成り立つのである。すなわち「物質・自然」、「身体・生命」、「心・意識」、「精神・自覚」、「超越・本覚」という構造で成り立つ人間存在は、まず、最下の物質・自然の地平において、自然人(homo naturalis)である。次に生命・身体の階層においては、人間は大地の間に直立歩行する「直立人」(homo erectus)である。

直立歩行の体制の成立は、人間固有のものである。熊やカンガルーやチンパンジーや恐竜等も、二本足で直立し歩行するように見えるが、歩行の機能が全部後ろの二本足に託されて、手が完全に自由になるのは、人間だけである。手の自由化から出てくるものは、いわゆる色々な道具を作り、機械を持つという意味で、技術人または工作人(homo faber)の成立である。

さらには、直立歩行の体制の成立にともなう発声器官・大脳の発達により、人間固有の本質として言語が成立

教育学的地平

自覚	自律	内面的覚醒 (egersis)
指導	他律	文化財の伝達 (dictatica)
養護	無律	発達の援助 (trophe)

(ナトルプ) (シュブランガー)

人間学的地平

天 地	超越・本覚	宗教人	homo religiosus	永遠化 (心胸)
	精神・自覚	歴史人	homo historicus	自律化 (名)
		道德人	homo moralis	倫理化 (肚)
		社会人	homo socialis	社会化 (顔)
		知性人	homo sapiens	大脳化 (頭)
		言語人	homo loquens	口唇化 (舌)
		工作人	homo faber	上膊化 (手)
	心・意識	内感人	homo interior	交感化 (胸)
	身体・生命	直立人	homo erectus	直立化 (足)
	自然・物質	自然人	homo naturalis	内臓化 (胃腸)

する。すなわち言語人 (homo loquens) の成立である。さらにその言語をふまえて考える人間、いわゆる「知性人」(homo sapiens) が成立する。これらはあげて構造連関的に直立歩行の体制に結びついている。

すなわち、直立歩行の体制を基底として、工作人・言語人・知性人が相関的に成り立つのであるが、人間が直立歩行をするに及んで、顔と顔を真正面から合わせて (face-to-face) 相対するとともに、言語をもって交通するところからプライマリー・グループ (primary group) としての人間集団が成り立つ。すなわち「社会人」(homo socialis) である。さらには、歴史の次元において、いわゆる伝統をふまえて、「歴史人」(homo historicus) というものが出てくる。

このように次元が高まるにつれて、しだいに何らかの意味で、シンボルを中心にしたような世界、すなわち形を越えた超越的な地平が、一切包括的なものとして意味をもってくる。かかる全体的・超越的なものにかかわるものが、「宗教人」(homo religiosus) である。文化人類学者などが報告しているように、いかに原始的な民族といえども、必ず一方では道具をもっているとともに、他方、いかに素朴的にせよ、宗教をもっていることは、人間の本質を究明する人間学にとって重大な意味をもっている。かくて人間は「自然・物質」、「身体・生命」、「心・意識」、「精神・自覚」、「超越・本覚」というような階層的構造において成立するのである。

以上、概観的に展開した人間生成論的階層構造と、またそれに対応する人間教育の発達段階とを表示すれば、次のごとくなるであろう。